

## インドネシアにおける多様なイスラーム

加藤 久典

はじめに

今日の世界におけるイスラームは、西洋社会との対立の構図によって捉えられることが多い。二〇〇一年のアメリカ合衆国における同時多発テロ、またイスラーム国（IS）による異教徒の殺害やテロ行為は、西洋の文明と相容れないイスラーム的価値に基づくという見解を助長させ、日本を含めた西洋社会におけるイスラームのイメージを著しく悪化させた。<sup>①</sup>しかしながら、ISなどに代表される過激主義グループがイスラームという宗教そのものを代表するものではないことは言うまでもない。中東で生まれたイスラームが各地域に伝播し、現代では世界の人口比率の二三%を超えるほど広がりを見せている。<sup>②</sup>ムスリム（イスラーム教徒）はコーランやスンナ（ハディースと呼ばれるムハンマドの言行録を含む慣習）に従って暮らすことを求め

られるが、それぞれの地域社会で多様な社会文化に影響を受けながら生活しているのが実際だ。その意味ではイスラームは極めて多様であり、ステレオタイプ的に理解することはイスラームに対する誤解を生むことになる。

世界で最も多くのムスリム人口を抱えるのは、東南アジアのインドネシアである。統計的には、約二億五〇〇〇万人の人口の約九割がイスラームを信仰している。インドネシアは五〇〇以上の種族を有し、地方語は三〇〇を超えると言われ豊かな地域文化を持つ多民族・多文化の国だ。現在はイスラームが最大の宗教であるが、イスラーム伝播以前のヒンズー教や仏教、精霊崇拜などの伝統も根強く残っている。八世紀にシャイレンドラ王国によって建立されたボロブドゥール寺院や九世紀に古マタラム王国によって建てられたヒンズー教のプランバナン寺院などは、その多宗教性を証明するものと言っているいいだろう。イ

インドネシアはシャリアに基づく国家運営を行ういわゆるイスラーム国家とは異なり、サンスクリット語のピネカ・トゥンガール・イカ（多様性の中の統一）を国家のモットーとし、世俗的共和国制を国家の基本としている。

こういったことからインドネシアにおけるイスラームは、その柔軟性と寛容性を特徴とすると言われる。しかし、その一方でより厳格な教義の実践を求めるムスリムたちが存在しているのも事実で、インドネシアのウマツト（イスラームコミュニティ）は実に多様である。本稿では、インドネシアのイスラームの現状を解説しながら、イスラーム教義の厳格な遂行を求めるムスリム、また「信仰する者」として自らが住む社会文化に影響を受けつつムスリムたろうとする者たちの現実について考える。

## 一 インドネシアの歴史的選択

インドネシアは現在、共和国体制をとっているが、そこに至るにはイスラームの理念をより忠実に具現化するシャリアの施行を求める者と、あくまでも世俗的な国家運営を望む者との確執があった。日本による占領時代の末期、インドネシアの独立がいよいよ現実味を帯びてくると、新国家におけるイスラームの位置が大きな議論となった。独立運動のリーダーであったスカルノは、宗教的中立主義の立場をとりイスラームを中心とした国づくりには消極的だった<sup>③</sup>。しかしながら、ジャカルタ憲章

として知られる憲法の草案の段階では「ムスリムは、シャリアに従う義務を負う」という条文が明記されていた。これは、イスラーム勢力に配慮した政治的な妥協でもあった。

しかしながら、憲法発布後にはその一文が削除されている。それには、非ムスリムらの反発があったとされるが、インドネシアはこれにより世界で最も多くのムスリム人口を抱える世俗国家としての道を歩むことになった<sup>④</sup>。しかし、ジャカルタ憲章の完全な施行を求める者にとっては、不満の残る選択であった。一九四〇年代後半からは、シャリアの完全実施を求める者たち、つまりイスラーム理念の具現化を制度として完成したい者たちは、世俗体制に抵抗する *Darmasigra* 運動をイスラーム政党であるマシュミの力をかりながら活発化させた<sup>⑤</sup>。これらの抵抗は失敗に終わるが、二一世紀初頭にインドネシア国内で多発したテロ事件にも影響を与えたことは否定できない<sup>⑥</sup>。

## 二 「イスラーム社会」と「ムスリム社会」

イスラームを宗教として理解するとき、これまで述べたようにイスラーム教義の忠実な実践を求め、コーランやハディースに書かれたそのままを純粹に守ろうとする者がいる。彼らは、そのイスラーム理念の実現こそがムスリムとしての正しいあり方だと考えている。しかしながら、イスラームの教えの純粹性を絶対的に規定することは難しい。なぜなら、コーランやハディースの解釈は知識を備えた宗教指導者によって行われ、必ずしも

イスラーム世界で統一されたものではないからだ。その意味では、イスラーム理念を飽くまで求める者たちは、まだ実現されていない「イスラーム社会」の構築を目指していると言うことができるだろう。

その一方で、イスラームの教義を地域社会の在り方や状況によつて柔軟に解釈するムスリムたちがいる。宗教的に純粹な「イスラーム社会」よりも、そこに暮らす人々の社会的要求や歴史的背景に影響を受けた信仰の実践を行う人々だ。理念としての「イスラーム社会」に対して実践を重視する「ムスリム社会」と定義することができる。その割合は後者が絶対的多数であつて、前者は常に少数派として自らを大衆とは異なる真のムスリムと規定し、「ムスリム社会」にあつて孤立することも珍しくない。時には「ムスリム社会」の住人を信仰の逸脱者として非難し敵対することもある。

インドネシアにおいては、二〇世紀初頭に中東のメッカで学んだアフマッド・ダフランがムハマディアというイスラーム団体を設立し、土着の宗教やヒンズー教、仏教の影響を強く受け教義の実践を受け入れていたいわゆる「ムスリム社会」に対する改革を始めた。ムハマディアは、それまでのインドネシアの伝統を退けるという意味で近代派と呼ばれた。しかしその一方で、インドネシアでは特にジャワを中心にイスラーム寄宿舎学校（ブサントレン）を運営するキヤイと呼ばれるムスリム指導者たちが、地域社会や伝統文化に影響を受けたイスラームを拒

否することなく、インドネシアの社会に受け入れられてきた。その代表的なイスラーム団体が現在でも全国で最も多い会員を抱えるナフダトゥル・ウラマ（NU）で、近代派に対してNUは伝統派と呼ばれる。

### 三 「ムスリム社会」の実際

現代のインドネシアでは、ムハマディアやNUといった大規模イスラーム団体は病院や学校運営などの社会活動に重点を置き、その宗教的差異をことさら強調することは少なくなつてきた。両団体がそれぞれ巨大化し、会員のイスラームに対する理解が多様化したこと、また一九九〇年代後半から二〇〇〇年代にかけてムハマディアのシャーフイー・マアリアフやNUのアブドゥルラフマン・ワヒドなどの有力指導者が両団体の融和を目指したことが理由として考えられる。

スハルト政権崩壊後、宗教的に厳格な「イスラーム社会」の構築を目指す者たちはムハマディアのような大規模な団体ではなく、より精鋭化された団体を設立しシャリアの国法化を目指し活動をするようになる。また、「ムスリム社会」の住人たちは、「よいムスリム」であるという意識を持ったまま、それぞれの社会状況や個人的な事情にイスラームの教義を適応させながら日常の生活を送っている。

「ムスリム社会」の顕著な特徴を持った事例をジャカルタにある宗教グループに見ることが出来る。彼らのイスラーム教義

に対する理解と宗教態度を分析することは、「イスラーム社会」の対極に位置する「ムスリム社会」の理解への一助となり、ウマットが多様化していることの証明にもなるだろう。

インドネシアの首都ジャカルタのタンジュン・プリオックという港湾地域に、スマトラ出身で預言者ムハンマドの末裔と信じられているンバ・プリオックという「聖人」の墓がある。二〇一〇年四月、土地の所有者である港湾会社の立ち退き要求に抵抗するンバ・プリオックの子孫を名乗る一族とその信者が警官隊と衝突し、多くの死者を出した。この事件は、インドネシアに「ムスリム社会」が根強く存在していることを改めて示したものだ。本来的なイスラームの教義では、アラール以外の者に願いをかけることは禁止されている。コーランには以下のような教えがある。

おまえたちの主はいいたもうた、「わしを崇拜せよ。おまえたちに応えてやろう。わしを崇拜することにそむいて高慢にふるまう輩は、哀れな姿でゲヘナ入りだ」(信者の章：40—60)

聖人とされるンバ・プリオックも例外ではない。しかし、この墓には全国から多くの参拝者が訪れ、健康の回復や商売繁盛、その他世俗的な願いを墓の前で念じる。また、五ヘクターを超えるンバ・プリオックの墓の敷地内では、家の壁などに貼れば信者の身を守るというステッカーなどが売られている。こういったお守り(ジマット)は、イスラームの教義では禁止され

ている。

また二〇一〇年四月の武力衝突に関して、多くの「奇跡」によってンバ・プリオックの信者が勝利した物語が書籍として売られている。例えば、墓の強制撤去のために運び込まれた機材が突然停止し、海から身長三五メートルの巨人が現れそれに続き、白い馬に乗った兵士たちが警官隊を追い払ったという<sup>(8)</sup>。それ以外にもンバ・プリオックにまつわる神話が残されている。スマトラからジャワに向けてイスラーム伝道の旅に出たンバ・プリオックは、途中嵐に襲われ遭難する。ンバ・プリオックは現在の北ジャカルタの浜に打ち上げられたが、その傍らに米を備蓄する壺(プリオック)と権があつたという。住民はその権を墓標とし、壺は海に流されてしまった。しかし後にその権はタンジュンと呼ばれる木となつて成長し、プリオックは三年から四年ごとに巨大な家となつて海から浮かび上がるようになった。それが、現在の地名であるタンジュン・プリオックの由来であるという。

しかしこういった先祖から伝わる迷信や神話はイスラームにおいては禁止されている。アラビアのジャヒーリーヤの時代に人々がそういった言説に惑わされたことに由来する。例えば、コーランには先祖から伝えられたことよりも、アラールによって教えられたことを重視するようという啓示がある。

もしかれらにむかつて、「神(アラール)が下したもうものに従え」と言うならば、彼らは、「いな、われわれは先祖

が見出したところに従う」と言うであろう。いったい彼らの先祖が何かもわからず、正しい道に導かれなかったとしてもなのか。(雌牛の章…2—170)

加えて、ンバ・プリオックの末裔であるハビブ・アリは、特殊な霊的能力を持っているとされ彼が祈りを始めると、信者たちは一斉にペットボトルに入った水を差し出す。それが聖水に変わると信じているのだ。こういった魔術(シヒール)はイスラームでは禁じられている。それにもかかわらず、ンバ・プリオックの墓への参拝者は後を絶たない。警官隊と信者や地域住民との衝突の後も、墓を撤去するには至らなかった。それによって、ンバ・プリオックの霊力の大きさが再認識され、その宗教的権威を高めたのだった。

これらのンバ・プリオックの信者とハビブ・アリの行為は、いわゆる書かれた宗教理念に忠実である「イスラーム社会」を構築しようとする者は到底受け入れることができない。それは反イスラーム的行為ですらある。しかしながら、ンバ・プリオックの信者らにとって、強大な霊力を持った聖人を信じることは、その存在がイスラームに関係している限りイスラームの逸脱にはならない。むしろ、ムハンマドの末裔という系譜は、そのイスラーム性をさらに高める役割も果たしている。彼らこそが「ムスリム社会」の住人である。

#### 四 「イスラーム社会」の実態

以上述べてきたように、イスラームの教義を実生活の場において柔軟に解釈しているムスリムたちがいる一方で、イスラームの宗教的理念をより厳格に日々の暮らしの中で具現化したいと考えているムスリムたちも存在する。彼らの生活は、コーランやハデイスといったイスラームの理念が書かれたものを中心に展開している。彼らを経典主義者、または原理主義者と呼ぶこともできる。しかしここで注意を払わなければならないのは、彼らが決して暴力的なテロリストではないということである。

もちろん、イスラームの教義にはジハードの思想があり敵対する者と戦うことが義務とされている。しかし、その戦いは防衛に重きが置かれ、また無差別な殺戮を認めるものではない。インドネシアにおいていわゆる「イスラーム社会」を実現したいと考えるムスリムたちは、シャリアの施行を目指し、イスラームがインドネシアの国の中心となることを望んでいる。その点では、現状の共和制の存続を望む「ムスリム社会」の人々と大きな違いを見せる。

「イスラーム社会」のムスリムたちは、飽くまでイスラームの根本原理に忠実であろうとする。つまり、シャリアが導入されイスラームが政治、経済、社会の中心となれば無用な殺戮行為はなくなり異教徒との共存が可能になるという。例えば、中部ジャワの古都ソロでプサントレン(イスラーム寄宿舎学校)

を運営し、「原理主義者」として知られているアブドゥル・ロヒムは、イスラームが強制的な改宗を異教徒に勧めることを教えに背くとして戒め、またイスラーム国（IS）の行為を厳しく批判している。その根拠の一つとなるのが、コーランの一節だ。

……殺人を犯したとか地上で悪いことをしたとかという理由もないのに他人を殺す者は、人類すべてを殺すのと同等であり、他人を生かす者は人類すべてを生かすのと同等である……（食卓の章…5—32）

このように、「イスラーム社会」ではテロリズムは明確に否定される。むしろテロリズムという無差別殺人は「ムスリム社会」においてその社会的・政治的・経済的状況、または個人的利害に合わせてイスラームの教義を歪曲して解釈した結果に過ぎない。

### おわりに

インドネシアにおけるイスラームは、単一の統合された宗教としてではなくむしろ信者の宗教的態度によってイスラームのコミュニケーション（ウマット）が分裂し、緊張関係を保ちながら存在している。こういった現象は、インドネシアのイスラームに限らず他の地域の宗教にも当てはまるものであろう。

テロリズムによって形成されたイスラームに対するイメージのみをイスラームに対する判断の根拠とすることの危険性がわかる。「ムスリム社会」の住人は、イスラームの社会における

在り方を左右する存在だと言いうことができる。本稿で述べたインドネシアのイスラームの在り方から、イスラームを含めた宗教は有機体として存在しているということがわかる。

本稿は科研費（○）16K02004の助成を受けたものです。

- (1) Huntington, S. P., *The Clash of Civilizations and the Remaining of World Order*, New York: Simon & Schuster, 1996 を参照のこと。
- (2) 小杉泰『9・11以後のイスラーム政治』岩波書店、二〇一四年六頁。
- (3) Ricketts, M. C., *A History of Modern Indonesia Since c.1300*, London: Macmillan, 1993, p.209.
- (4) 永井重信『インドネシア現代政治史』勁草書房、一九八六年、二四—二五頁。
- (5) Cribb, R. and Brown, C., *Modern Indonesia A History Since 1945*, London: Longman, 1995, p.39.
- (6) インドネシアでは二〇〇〇年代以降、二〇〇二年と二〇〇五年で世界的なリゾト地であるバリ島で、また首都ジャカルタでは二〇〇四年、二〇〇九年にオーストラリア大使館や高級ホテルが自爆テロの標的になった。
- (7) 一九六六年から一九九八年までインドネシアにおける権力を握り、第二代大統領として独裁政治を敷いた。一九九七年に起きたアジア通貨危機による経済の悪化により、その求心力を失い一九九八年五月に辞任に追い込まれた。その後、レフオーマシと呼ばれる改革運動が起り、社会の民主化が進んだ。
- (8) Kato, H., "Religion as an Organic Entity", *Comparative Civilizations Review*, No. 67 Fall 2012, pp.37-49.

（かとう・ひさのり、インドネシア地域研究、中央大学総合政策学部教授）